

松田義純著
高岡增隆閱

弘法大師御一代畧傳

全

法福寺藏版

弘法大師一代略傳序

夫者法也大仙國者之眼
肝也然實皇之樞機而
厥教鎮擁於國家厥德
振救於黎庶之鎔鼎也

特36



是故深合信手者於塵
積累之過譽者罕可但
其捷焉致低頭非東嶺起
無驕之傾享游似無為實
清嗚呼顆之裁德馬傳

焉者誰身獨吾遍思金
剛而已為談一世之理章
也雖有汗牛老棟匹夫匹
婦無不能甘味用茲松田
義純法袖使輿童草

弘法大師之像



印專

隸捷覽之於信公其洪
 澤躬成良緣之一端更
 和解以為梓鑿者爾

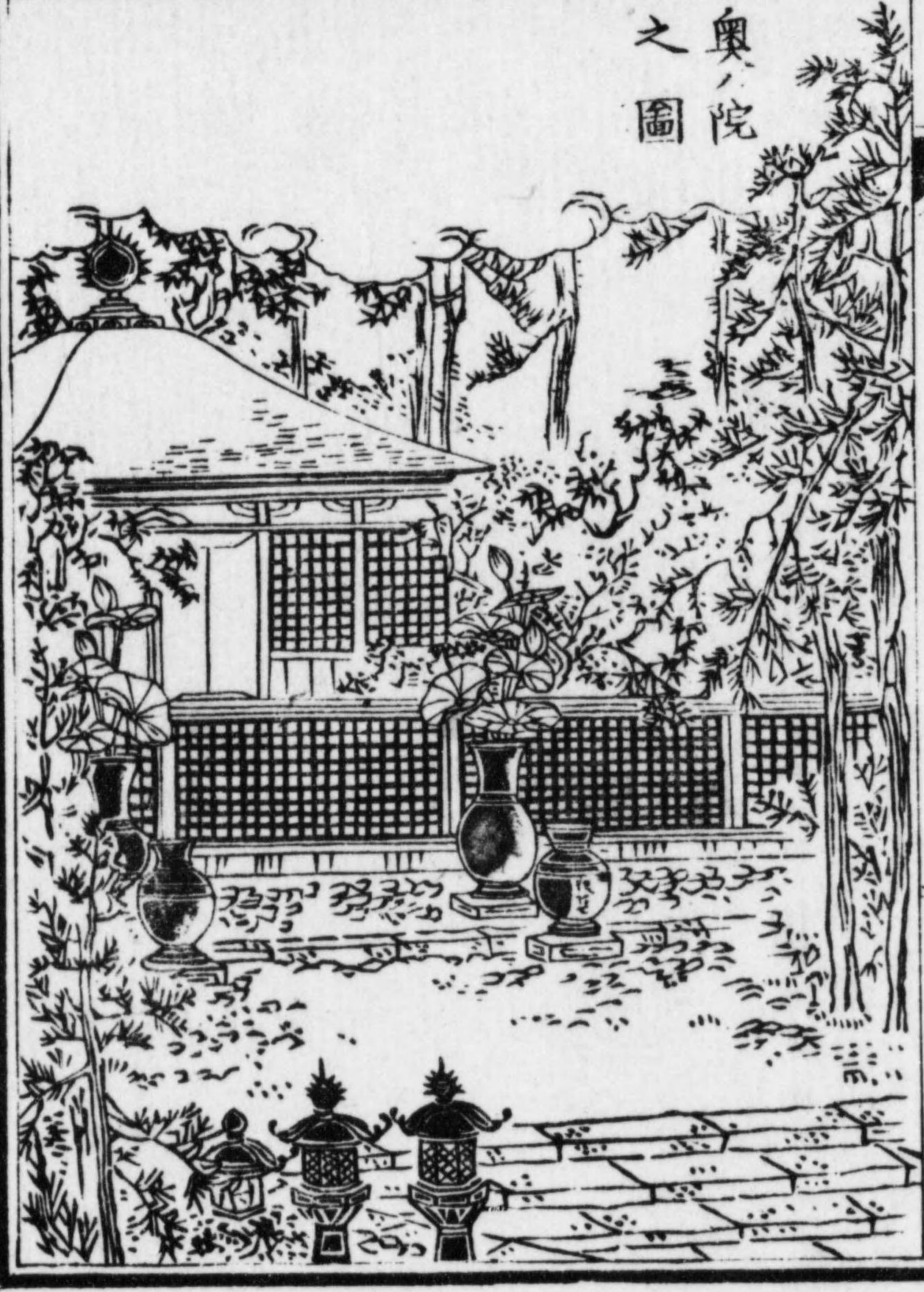
明治十七年三月
 中教正高岡增隆

金堂之圖



印
田
各
車
寸

奧
院
之
圖



社
界
仁

降誕
異瑞

弘法大師御一代畧傳

○凡そ菩薩の要心の慈悲を以て基とし化
 他を以て先と成とありて弘法大師ハ肉身
 を高野の羅洞小留めて福利を万世の衆生
 に施し給はんとして生か讃州多度郡屏風浦
 又受く父君ハ佐伯直と称し畏くも其源遠
 く天胤より出て世々封地を領し給ひぬ壽母
 ハ阿刀氏の女たり夫婦の間だ常に琴瑟比
 調ありて善く神佛を信ぜり一日夫婦の夢

大塔之
縮圖



御一代

に天竺より聖人来て懐小入と見て妊色里



十二月を経て光仁
帝宝龜五年六月十
五日小降誕し給ひ
ける時異香室中に
満ち光明屋上を照
しければ見聞く人
皆奇異の思をなせ
しとなん

夢語 諸佛

誓願 捨身

○五六歳の頃平常に八葉の蓮花小座し諸
佛と共に法理を物語りされど御両親も
口外ち給はざりしと且又衆人に卓起
せ給へば苟且の遊戯にも土塊をもて佛像
を造り草木を集めて堂宇を模構給ひけれ
ば爺嬢ひとへにいつくしみ給ひて御名を
貴物と名けられり

○七八歳の頃まき佛弟子とあらせ給ひ
ん御志はあまり高き峯小登り諸佛小誓ひ



我れ佛法を弘め衆
生を救ふこと能
ずんば今此身は諸
佛ふ供養まべしと
て十方を礼し三宝
に誓いて深き谷へ
飛給ふこと三度に
及べども不思議や
毎回天人抱きあげ

勅使
三拜

其本所に置き後遂に釋迦如来光明を放ち
出現を給ひぬれば大師大歡喜礼拝し
給ひ志と是より此山を捨身が嶽又ハ我拜
師山とも名く傳あり
○九歳の頃問民苦使として朝廷上里各國へ
勅使をめぐらされ地方に善悪を検査に至
らせ給ふ時大師ハ門外より群童をせもな
び土佛を造り給ふ勅使を見て急ぎ馬よ
り飛下り謹肅て大師を礼拝して曰く此公

始開 誕縁

ハ凡人ぼんじんふつらも既にすなはち四天王しつてんわう衛護ゑごし給へば
定めてさだめ佛菩薩ぶつぼさつ化現けげんあらんと世の人よのひと是を
聞てき御名ごなを神童しんどうと申奉りぬと
○十二歳の時あろひ一日いちにち父母ふぼの家族かぞに語り給ふ
にハ此兒こゝろハ佛子ぶつこなるべし其故そのゆゑハ昔むかし胎内たいたい
に處ある時とき我われハ天竺てんぢくの聖人せいじんかると謂ふ是
俗家ぞくかの人ひとハ非あらず終つひに佛門ぶつもんハ投なじて出家しゅつがせ
しむべしとあるを大師だいし坐間ざまハ在ありてこれを
聞き大小だいせう歡喜くわんぎし給ひしと

俗典 鎮仰

○斯こゝろハ外戚げいせきの叔父おじ阿刀あとうの大足おほあしとて伊豫親いよのちか
王おうの學士がくし小従こたひひて儒典じゆてんを學まなび給ふ小天性こてんせい
明敏めいびんなれば一ひとを聞きく百ひゃくを察さつし遂つひに叔公おじこう小
就つて京洛きやうらくよ登のぼり槐子くわいこにまじはりあそびあそび
味酒あじさけの清成きよなり及び岡田おかたの博士はかせ等の門戸もんこを
叩たたて博ひろく經史けいし文學ぶんがくの壺奥こゝろを窮きつめ給ふと
や
○其後そのち三論宗さんろんしゆの智識ちしきたる石淵いそがの勤操きんそう僧正そうじやう
に執謁しやくてつれば僧正そうじやう一ひとたひ視みて此人こゝろハ凡人ぼんじん

勤操 入室

印畧傳

日

大龍 宝釵

にあらむといと喜悅し給ひて師弟の御契
 約淺からむして直に大虚空藏の法を受け
 心府に深く持念し給ひしよりまろく佛敎
 に信從ましませしを以て三敎指歸といへ
 る書を著し俗典の死後小益なきことをの
 べ給ひて近士とせ給ふとき御名を無
 空とぞ改められたりとぞ
 ○其後槐市を遁れ山林經行の時阿波國大
 瀧の嶽に至り道業の成不を試みんとて衞

惡魔 退治

心を澄し虚空藏聞持の法を修し給へば宝
 釵瑜伽の檀上ふ飛来りいよく悉地成就の
 奇瑞を顕ハせりと
 ○又土佐國室戸の崎にて求聞持の秘法を
 御修行おし給ふ時異類異形の惡魔夜なく
 来りてさまたげぢなせども誓心堅固小御
 持念怠りなかりしかば明星来て口に入る
 其時唾を吐き出し給へば其唾き海底に沈
 みて忽ち光明を輝暉せば惡龍鬼類恐れを

天狗除却

なして再び来らざりしとぞ
 ○又室戸より三十丁計隔て、一の勝地あり斯不於て宿願を果さん爲に一の伽藍を建立せんとなし給へば其傍より大なる楠ありて天狗とも集聚りさまぐと障号をなしければ大師即ち結界し給ひて悪魔を悉く足摺の崎に追込られて後ち建設なりし寺を大師自ら金剛定寺と額を懸られしと
 なん

魔障降伏

出家受戒

○伊豆の桂谷といへる所に至り給ふ時も悪魔多く集りて修禪の行席を種々に障号をなしければ大師虚空小向ひて大般若此魔事品を書せ給へば六書八體の點畫みだるしことなく一々の文字各金色の光を放ちければ悪魔忽ち千里の外に逃げ去魔境を變して佛地となし給へりと
 ○大師二十歳の御時和泉國槇尾山寺に於て石淵に贈勤操僧正を師として髻髪を剃



り積年の宿願を遂させ給ひ即ち沙弥托十
 戒七十二の威儀を授り奉り
 御名を教海と号し給ひける
 が後にあらたえて如空と申
 し奉るぬ其後二十二の御時
 東大寺の戒壇院に至り唐僧
 恭信律師を啞して具足戒を
 受け空海と御改名ふし給ひ
 ぬ

久米 感經

○大師猶佛法の真旨を窮めんことを三世
 十方の諸佛に祈誓し給ふ時夢中に人あり
 て汝が求むる妙法ハ大和國久米寺の道場
 たる東塔の下にあまど靈感を蒙り件の所
 に至り給ふに果して大日經を得給へども
 文義解し難き所數多あれど本朝に問窮む
 るに人なけれバ更に入唐求法の洪願を發
 し給ひぬ抑々此經ハ中天竺の善無畏三蔵
 曾て密教を弘めんとて先小來朝し給へど

も時機未だ至らざれば後必き此法を弘むる智
徳此人あるべしと記載し即ち刹柱の下に
納めて震且に歸り給ひしとぞ

入唐
入洛

○桓武天皇延暦二十三年六月大師御年三
十一入唐留學の勅命を恭羨はり遣唐大使
藤原の賀能等と共に肥前國より第一の船
に乗望て出帆し給ひけるが暴風逆波の爲
に數十日を経漸く八月れ初旬辛苦して福
州不着岸し大使ハ州長に渡來の由を紙上

に載て贈晋すこと再三及ぶと雖も敢て
受容されば大師代りて數字を寄るに伏
讀三四して是れ非凡の文字なりとて先の
疑情をひるがへし却て懇に來着の人々を
待遇し尋で此由を帝都に奏しけるに京洛
より大使兼に大師にハ七珍莊飾の馬を以
て奉迎あり其靚装の美良こと翰墨に載せ
かたし斯て十二月下旬長安城小入て宣陽
坊の官宅小宿し給ひけり

青龍
入壇

御覽傳

○翌年の正月遣使ハ帰朝シ大師ハ留テ西
明寺に轉居シ名徳の師を尋る小青龍寺に
惠果和尚と云へる人の真言の大祖大日如
来より七葉三朝灌頂の國師ホシテ智徳兼
備の高僧なり大師其徳を思慕ヒ真ち小青
龍寺に趣きて和尚に親見給ひぬ和尚大師
を見て我汝を待こと久し何を遅かりしと
て速に香花を整理へ灌頂の壇を設け六月
より八月上旬に至り金胎西部並小阿闍梨

位等の灌頂及び秘密甚深の大法残る所を
く瓶水を傾て授與け給ひけるを積年従事
せし御弟子の内珍賀といへる僧大師の受
法を嫉妬惠果和尚に諷しけるに空海ハ元
より師の門徒小非ぞ密法を授け給ふこと
勿れと其夜夢に四天王来て其邪念を呵責
し給ひければ遂に大師の高徳に服し前非
を懺悔せり也又南都山階寺に守敏僧都も
大師の名望有るを毀嫌潜に護法の鬼神を

御覽傳

九

派遣し傳法の旨趣を窺察せしが大師之を
了知りて急卒結界し給ひしかば猛火熾炎
て近付こと能はざりしと

惠果
入滅

○惠果和尚臨終の期を悟り給ひて師資相
傳の尊像及び佛舍利經論法器等殘る所な
く大師に付属し畢りて門徒に告げ給ひけ
るは西部の大法の如來の秘藏成佛は直路
なり普く法界に傳て衆生を度せんことを
願ふ今日日本の沙門空海ありて是等の蓋與

を悉く授けたることハ是凡徒にあらず三
地の菩薩なるを以てなり且夫日出れば月
かくれ油盡ぬれば燈火消るハ物の常なり
我又真に歸せんことを願ふと即ち永貞元
年十二月六十歳を一期として入滅し給ひ
ければ四衆の合會地に満て萬民の悲感天
を動せり大師追慕の餘り其夜丹誠を凝し
て持念し給ふハ和尚宛然として形を現し
互に宿契の深きことを説き汝早く本國ハ

五筆
勅号

歸て有情を振救べし吾亦た汝が室小至ら
んとの給ひしとぞ

○爰小順宗皇
帝宮中の壁に
文字を書しめ
んと勅ありけ
れば大師左右
の手足と口と
に五筆を執り



水上
書字

五行を同時に書下し又一の壁小の墨を灑
ぎ給ぬに自ら樹の字となりければ帝皇を
始列座此群臣感歎称譽せざるなし茲小
因て五筆和尚と勅号ありて念珠を下賜し
給へり

○大師又城中を巡遊り給ふ時童子来りて
流水小字を書せ給はんことを望みければ
即ち乞ふ應じて水上に書給ふに点畫乱れ
ぎして流れ下ければ童子感嘆の色ありて

童子も水上に龍の字を書しに更なる流れを
して浮べり但右の小点なかりければ大師
一点を加へ給ふに忽ち真龍と成て空に登
れば童子我の文珠なりと云て光を放ちて
虚空に登給へり

渡天
見佛

○大師常小天竺の靈鷲山に詣せんことを
宿望み給へども道路峻険にして容易く其
願を果さざりしが或時神童来り白馬に乗
給ひて飛が如くに流沙に至り又青羊来れ

は是に乘て無難に大河を過ぎ或は飛車に
倚て葱嶺等の峻巖を越へ夢の如く歩いて
靈山に至り給へば忽ち山の響くこそ百雷
の轟くが如く又香雲佳氣幽谷に満つと雖
ども進歩に目途なければ暫く躊躇なし給
ふ時空中より鉄鉢の飛来りて光を放ちけ
れば其光を求めて山頂に至り給へば釈尊
儼然として諸佛諸天神を従へ坐し給ふ大
師進下深く如来の教命を受け再び前の如

く馬車の助けを得て西明寺にかへり給ふ
其間七晝七夜更に飢寒からざりしと云
ん

三帖 授撫

○大師求法の洪顔を遂て將に歸朝せんと
思召ける時明州の濱に於て誓ての給はく
吾今傳授する処の密教相應の靈地あらは
先き小至りて留るべしとて御手小持給へ
る三帖を空中に擲給へば即ち鳥の如く小
日本の方を指て飛去ければ之を見る道俗

飯朝 上表

賀春 生水

驚歎せざといふことなし
○平城天皇大同元年十月万里の波濤無難
に越へ筑紫に歸着き給ひ入唐受法の首尾
請来の經論及び法器等一卷の書小目錄し
大宰の大監高階の真人遠成小附して上奏
し御身の筑紫に留り給ふ
○大師入唐の時豊前賀春大明神護法あら
んとめ神託を蒙らせ給ふ故報謝として同
社へ詣せられけるが此地小樹木の無を見

上洛 講經

て香水を灌ぎ加持し給ふ一夜の間に草木万株生茂たりと又藝の嚴島小詣で彌山に登り求聞持の法を修し瓶花の拍の木を堂の側なる地に挿し給ふ忽ち根芽を生し大に榮へ今猶存せりと

○大同二年勅旨に隨て入京し請來の密教を天下に流布可の宣下を蒙り尋で大和國久米寺に至り大日經を講し給ひし時一万餘は大小の神祇形を現し來聽ありしと

御柴 手水

八幡 契約

○同三年植尾寺に在て水の甚た乏しければ平地を加持し給ふに清泉湧出して今に絶へぬ又檜の葉よて御手を清め椿の葉に投じ給へば忽ち主付たる御柴手水とて今尚繁茂せりと

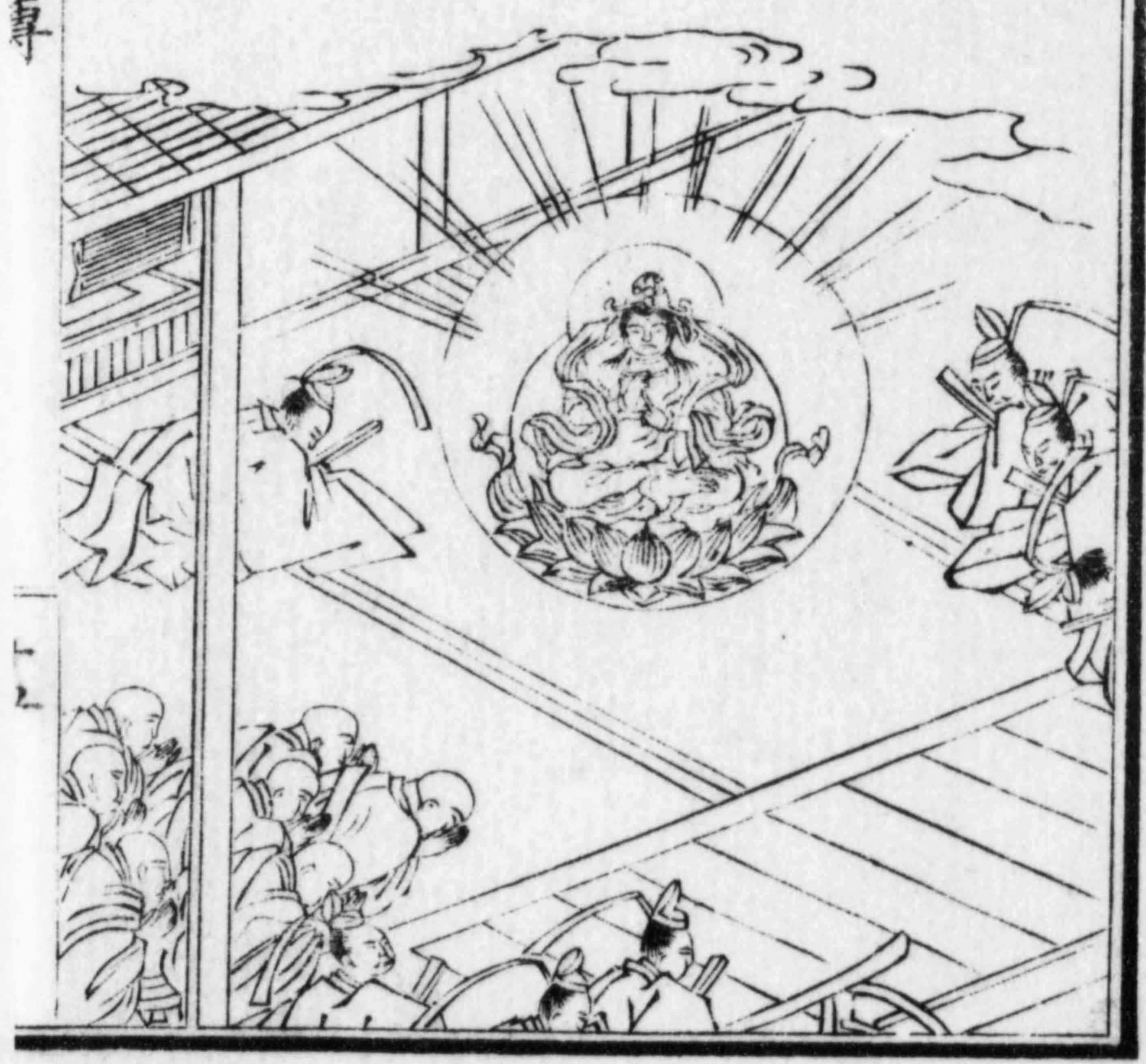
○同四年高雄山小在せし時八幡大神宇佐宮より斯に御影向ありて大師と共に佛法弘通の御契約あらせられ互に真影を寫さ

れ給ふを御互の御影とて現し高雄山に存
在はと

清涼成佛

○大師吾密法ハ國を治る民を利するの益
七宗に越へ餘教小勝りたる昔養し給ふ小
諸宗擧て允容さざれば嵯峨帝七宗の碩徳
を清涼殿ニ請し給ふ小何れも義鼓を鳴し
弁鋒を振へども大師に敵まはこと能ハま
して遂に説明小服せり然りと雖も尚即
身成佛乃疑情晴されバ大師御手小印を結

び觀念
疑し給へ
バ肉身直
小大日如
来と變じ
頭小五智
の宝冠を
戴き金色
の光り禁



太子物語

中なか小こ輝かき殿でん上じやう忽とち浄じやう土とと轉てんじけれら帝ていハ
 玉たま堅かを下くだりて敬けい礼れいなし給たまひ排な列れいる大臣だいじん諸しよ
 宗しゆの龍りゆう象しやうも各かく地ち小こ伏ふし涙なみだを流ながして礼らい拜はいせ
 り茲こゝ小こ於おて列れい坐ざの名な德とくハ速すみに御ご弟てい子しとな
 皇み帝ていも亦また師しと仰あやぎ給たまへば貴き賤せん上じやう下げ人にん心しん歸き
 向むかせざるなし

○大師だいし河か内ちの國くに聖せい德とく太たい子しの御ご廟べう小こ參さん詣けいし王わう
 小こ時とき靈れい洞どうの内うちより光くわう明めいを放はなち中なか小こ太たい子し影えい
 現げんし給たまひて吾われハ大だい悲ひ觀くわん音いんの化け身しんなるゆゑ

傳教入檀

んを詳くわ悉せきふ語かたらせ給たまひぬと
 ○同どう三さん年ねん天てん台たいの宗しゆ祖そ傳でん教ぎやう大だい師し更さらに吾われ高かう祖そ
 の御ご弟てい子しとなりて高かう雄じゆう山さん寺じに灌くわん頂ていを受う給たまひ
 ひし時とき貴き族しゆく高かう官くわん及及び諸しよ宗しゆの名な德とく并ならに沙しゃ弥み
 童どう子し等ら緇し素そ合がして一いつ百ひやく四し十じゆ五ご名な密みつ壇だん小こ望ぼう
 みたりと

○又また帝ていより金こん剛かう定てい寺じの額がくを書かせ申まをべしと
 て勅とく使し高かう雄じゆうの岸き小こ来きりけるに漫まん々くたる洪こう
 水みづ小こ川がは流り大だいに漲みなて渡わたること得えざれば河かを

隔河書類

隔て筆を揮ひ給ふに墨水霧の如く額面
ふ降り掛りたるふ文字の点畫鮮潔ふ頭ハ
れたりとぞ

宇治河船

○又或時宇治川の渡を越させ給ふに船賃
の代ふとして船はたふ船の字を書せ給ひ此
文字を乞者あらば代を得て與へよ必ず特
あるべしとして去給ふ其後病者あれば字を
削りて吞しむるふ愈むと云ことなし爲に
渡守ハ尋の宝を得しと成り

灵山降魔

法驗祥瑞

○大師真州信夫郡小至り給ふ時農民来つ
此山の靈山寺ハ古き寺なりしか天狗數多
集り魔界となせしとく至る者もあく鳥獸
たも通ハぬ且つ此の近傍郡村の人民を悩
乱くといかんとししがたし大徳何卒此難
を退去給へと願ければ即ち大師彼寺に行
き直に悪魔を獲の山へ封じ込給ひ再び侵
凌されば諸民々に悦喜せりと
○都て大師御遊化の間一念の観解を疑し

良修
禪地

一座の三昧を修し給時水輪に住し給へば
 法界悉く深翠の澤と變じ又覽字觀を凝し
 給ふ時ハ室中火炎燃揚るハ單へに六大無
 尋法尔自然の道理なれど徳瑜伽の聖者
 不あらざれば其實功を顯まこと能はる可
 信可貴なり

○弘仁七年大師密教相應の勝地を求め
 とく諸所の山水を渉覽し給ふ時大和國
 身長八尺計り弓箭を携へ黑白の二犬を

丹生
訖宜

具せる獵者不出逢て然るべき地所のあり
 やと尋給へば我住居山の晝ハ奇異なる雲
 聳へ夜ハ靈光を放てる地なり犬の行ふ供
 せ至りて見給ふやしと告畢て消失ぬ是即
 ち高野明神なりと

○麓小至り給へば高野明神の御母公たる
 丹生津姫の神大師の此山に來り給ふを歡
 喜あらせられて出現ましく宿願を果し給
 ふことを訖宜ありて即ち此山を大師小寄

附し神道の威福を増んことを誓ひ給ふと

高野登山

心經功德

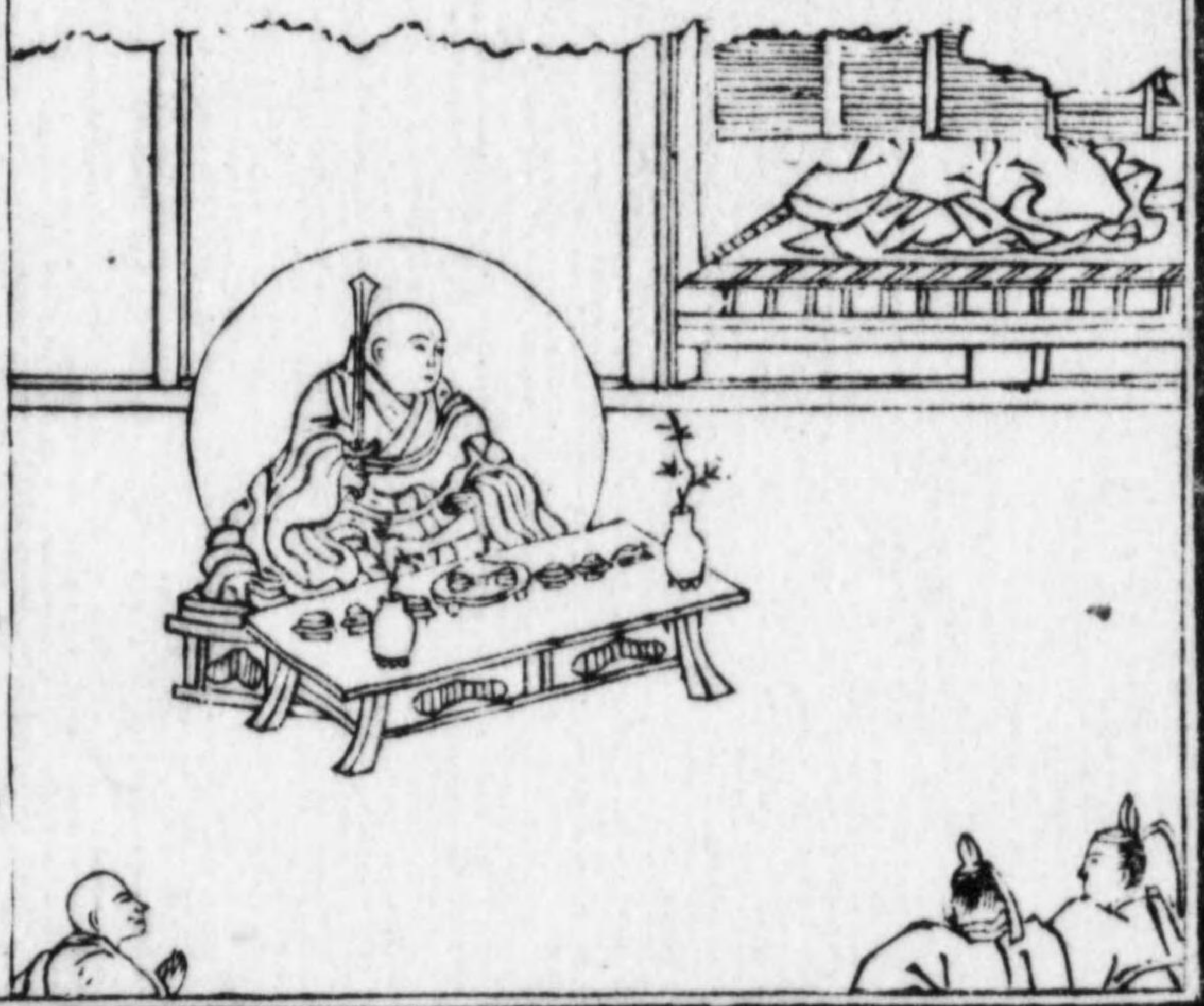
○神女の引導に隨て山頭やまのかみに攀登よぼせに絶頂いただき曠かう助すけとして究畢くわいひつの靈峯れいほう万樹ばんじゆ森々しんざたる中松枝ちゆうしゆえだ小赫々せうかくかくと光明山谷くわうみやうやまを照てらせゆ物ものあり奇きみ見給ふに曾かつて大唐たうたうより投給ひし三胎さんたいなりしかば愈密教相應の信地しんちなることを信認しんにんして歸京きけいし奏上そうじやうして此山こゝのやまを請求せいきうなし給へり

○同九年春疫癘えきれい天下てんか小流行せうりやうし貴賤きせん老若らうじやく死

亡なげを免まぬる者もの稀まれ小せうして尸原野しかののち小満せうまんち悲泣かなしみの聲こゑ四方しやうほう小喧せうけんし帝皇ていおう深ふかく憂うれひ給ひて自ら心經しんきやうを繕つくろ寫し大師だいしに供養くうやうせしめ給ふ時大師經王だいしきやうおうの秘義ひぎを講讚かうさんありければ結願けつがんの日ひを俟まちぎして疫病えきびやう頓とんに止やミ

御覽傳

九



大塔建立

死者忽に蘇生せりと
○弘仁十年大塔建設の時長五尺の宝劔を
堀出せり其銘小釈迦如來說法地迦葉佛成
道所とあり此銘文によれば高野は古佛の
淨刹なるくと信知せられたり

應天門額

○大師勅を奉じて應天門の額を書せられ
懸て後見給ふに應の点忘れ給ふとて下よ
り筆を投げ揚げて点をうたれける小位置
少しも違はざれば萬人手を打て驚きけり

帝皇受法

○同十三年平城嵯峨の兩帝皇子及び皇后
殿下等に大師灌頂を授け奉らる尤後れて
淳和仁明の兩皇國母等も御入壇ありとか
や

東寺下賜

○同十四年勅して東寺を大師に賜りて永
く真言の道場となし給ひ大師をして長者
小補せらる

八幡示現

○勅小依て鎮護國家の爲東寺小八幡大神
を勸請し給ふ時靈神空中小形を顯し給へ

稻荷 勸請

神泉 祈雨

大師其神影を寫しとどめたり
○過る年紀易よて異相の老翁に逢て佛法
擁護の誓約ありとて彼翁稻を荷ひ東寺の
南門に來臨ありけれバ大師悦をなし誠を
盡し神徳を崇め法味を捧げ給ひて後稻荷
山に勸請し給ふ是即ち稻荷大明神なりと
ぞ

○淳和帝天長元年の春天下大小旱魃し大
師勅小應じて雨を祈ること一七日小及ぶ

と雖も一滴の潤ひなし大師怪で定小入り
見給ふに山階寺の
守敏法力の大師に
及ばざるを嫉み諸
龍を水瓶の内に封
じこめたり然る小
天竺の善女龍王ハ
守敏の釣招ふりれ
りと御覽じて是を



高野 遺世

門徒 遺告

勸請し懇祈し給へば丈八寸の金龍と成り
 大蛇の頭に乘りて池中に現し給へば密雲一
 天を覆ひ三日の間洪雨小浴せりと
 ○同九年大師世務を辞し高野山小退き深
 く穀味を厭ひ専ら坐禪を好み給ふに付東
 寺高雄等の所有の寺院を實惠真濟等の諸
 弟子小附與し給へり
 ○仁明帝義和二年三月入定の期相迫りな
 ば諸門徒を集め告曰く吾閉眼の後ハ尅率

入定 留身

天弥勒慈尊の前小在て常ニ吾を信むる者
 を見てハ幸福を得せしめんと給ひ且つ
 懇懃の遺訓數多有けれバ各悲歎の涙小咽
 びつゝ弥勒の宝号を唱へ奉る内四方の道
 俗これを開傳て群り来り直小佛顔を拜し
 深く結縁をなせしとぞ
 ○同三月二十一日寅の一点御年六十二を
 一期として恬然と金剛の大定小入らせ給
 ふ時紫雲駿驟て異香室中に薫じ微妙の音

勅使
登山

樂山谷に徹通しければ御弟子の面々及び
 群参の縹素父母はな離るゝ思をなして號哭
 びつ御弟子達ハ輿をかきて真院に送り
 奉り七々日の間法味を捧て尊容を拜し奉
 るに顔色變ぜざる鬢髮長じ更小存生の体小
 異ならざと
 ○同廿五日仁明天皇并太上天淳和帝より勅
 使を以て吊書を賜り深く御悼の餘り政務
 を廢し給ふこと三日なりとぞ

嵯峨
飛館

贈官
衣賜

○兼和九年七月十五日嵯峨上皇崩御の時
 大師豫て御在世の砌堅く御引導の約あり
 たれば御館を嵯峨野小置奉りし小高野の
 方より天童五色の雲小乗り来て御館を尋
 き真院小安置し奉れば大師出定有て御弟
 子と共に御送葬なし奉り給ひしと
 ○文徳天皇ハ大師に大僧正を贈らせ給ひ
 清和天皇ハ法印大和尚位を贈官あり醍醐
 帝の時夢想に因て少納言平惟枝僧正觀賢

を勅使として弘法大師号及び御衣を贈り



給ふ時觀賢僧正御
廟の扇を開き懇小
祈請せしかバ秋月
の霧を出る如く尊
容現然と頭し給へ
バ玉髮延び御衣破
れ給へるを見て直
ち小玉髮を剃り御

巨益
畧者

衣を着せ奉りしとぞ

○大師御在世の時梵文に凝し草字を改め
いろはを製し給ふ是れ僅か四十七言に八
万聖教の秘真を含蓄なし古今の事情を達
し日用の急務を辨ぜ々の眼肝たり其他在
世の妙術及定後の靈驗等擧て盡し難し且
夫天子を始め奉り閑白大臣等一步三礼の
勞を厭はず高野御登嶂の事跡こと繁を以
て畧しぬ嗚呼高祖大師の偉徳廣大なるこ

徳島傳
と存世後世下有餘年の今日_二して一日の
如く一人として其洪澤_{ハク}小浴せざる者あら
じ誠_{マコト}小_コ以て難_{アツ}有次第_シならざるや

弘法大師御一代畧傳 終

明治十七年_六月_十日出版御届
全

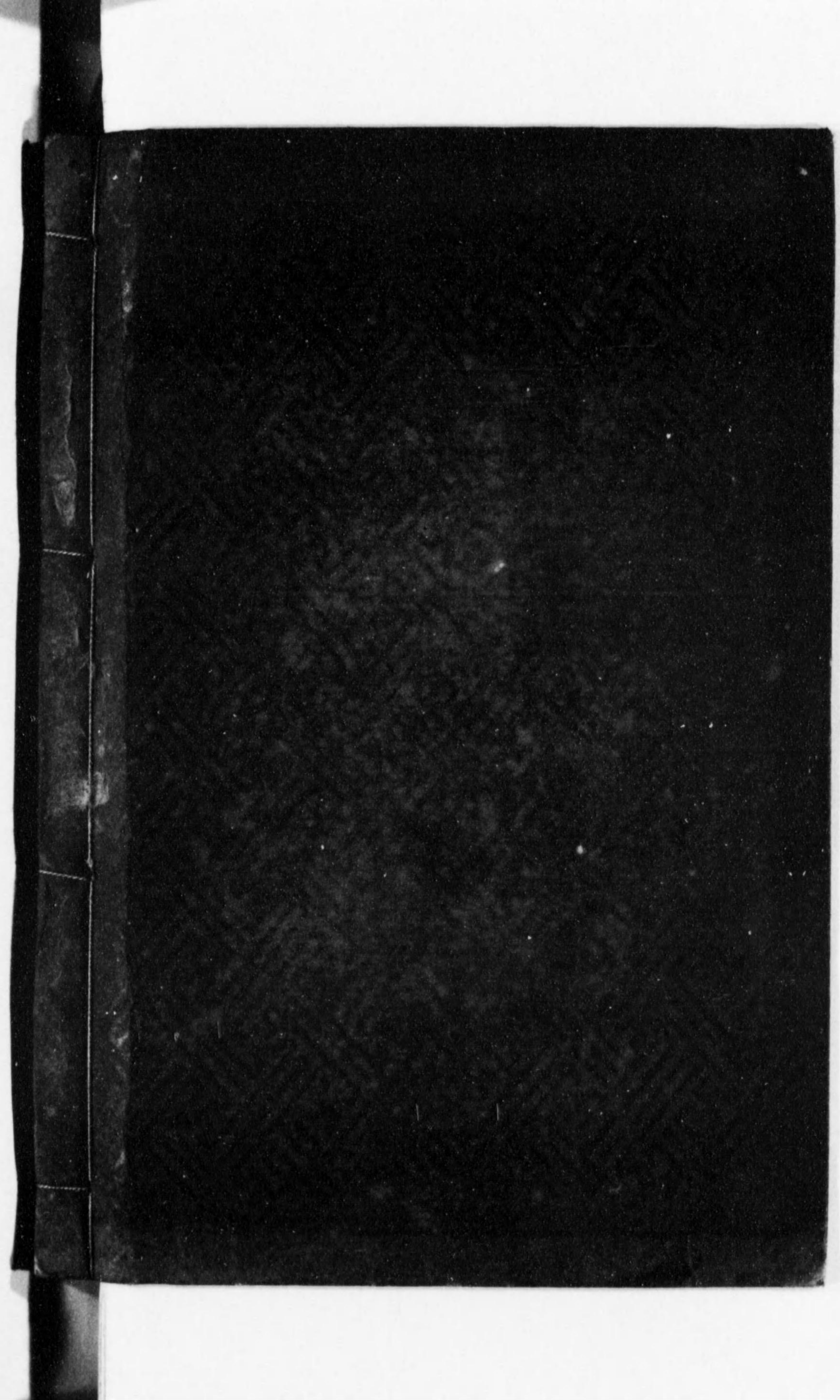
和歌山縣平民

著述兼
出版人

松田義純

紀伊國有田郡
楠本村六十七番地

定價金十二錢



弘法大師御一代畧傳

全

特36

872

館書圖京東

新書門

冊號架函類部

五五

016901-000-6

特36-872

弘法大師御一代略傳

松田 義純/著

M17.6

ABE-0119

